ようこそ校長室へ！
No. 52
令和６年２月21日
発行 ： 貝塚 敦

に	にこにこ笑顔で	い	いつもみんなで	つ	紡ぎ繋げる心で	に	日本一をめざすのだ

あの日あの時内履きを忘れた君へ

＜『受験』について考える②＞

今の世の中、全国的に塾や家庭教師を利用している生徒の割合がかなり高いことは容易に推察できます。学校の人間としては、ある意味、我々教職員の指導力に満足していただいていない結果とも受け止められ、やや複雑な気持ちです。

しかし、規則正しい生活をして、睡眠時間をしっかりとって、授業に集中して取り組み、家庭でもしっかり予習・復習ができる自己教育力や自立・自律心が備われば、塾などに行かずとも、それなりの十分な学力は見に付くものと、個人的には考えています。

ですから、教師の指導レベルが特に低くない前提で、生徒が授業中寝ていたり、教師の目を盗んでタブレットで授業と関係のないことをしていたり、いい加減な態度で授業を受けているとすれば、それこそ学力など見に付くはずはないと思っています。

私のかつての教え子のＣ男も、まさに典型的なこのタイプの生徒でした。

Ｃ男は、授業をはじめ誠実でまじめな学校生活を送っているとは到底言えず、成績も伸び悩んでいました。ただ、家庭は経済的にもかなり恵まれていて、３年生の10月頃から、慌ててかなりの日数と時間びっしり塾通いをするようになりました。

そして、受験が近づくにつれ、次のようなＣ男と私のやりとりが、幾度となく繰り広げられました。

「授業中寝ていたらダメだろ。」
「きのう夜遅くまで塾で頑張ったんです。めちゃくちゃ眠いんです。」
「それは君の自分勝手な都合だろ。学校の授業の方が本分だろ。」
「先生の授業はとてもわかりやすいので不満があるわけではないんです。受験までもう時間がないんで、志望校に向けて塾でマンツーマンで対策問題に取り組んで追い込まないと。」

　また、ある時には寝ないで珍しく必死に鉛筆を動かしているのでのぞいてみると、
「何やってんだ？」
「今日の塾の宿題です。今やらないと間に合わないんです。」
「それは君の自分勝手な都合だろ。学校の授業の方が本分だろ。」
「別に先生にもクラスのみんなにも迷惑はかけてないんで、いいじゃないですか。」

　毎度毎度そんなやりとりで、その都度粘り強く指導しましたが、私の注意に耳を貸さずに一向に改善する兆しはなく、半ばあきらめムードが漂いながら時間だけが過ぎていきました。ただ、私の担当教科の数学の時間に数学の塾の宿題をすることを百歩譲って目をつぶったとしても、数学の時間に塾の英語の宿題をやっている時には、怒りを通り越してあきれる思いで、声を荒げて叱責することもありました。

　さて、公立高校合格受験日までカウントダウンです。
　当時は、どこの中学校でも、３年生の先生方が手分けして、受験者数が多い高校には現地に出向いて、校門や生徒玄関入口周辺で生徒がアクシデントもなく受験高校にやってくるのを確認していたものです。自分の中学校の生徒に「おはよう」「がんばれよ」と挨拶して一声かけながら。
　間もなく受付時間終了だというのにＣ男がなかなか現れません。やっと時間ギリギリに受験生の一番最後にやってきました。母親の運転する高級車が校門の目の前に横付けされて、Ｃ男が車からあわてて降りてきたのです。Ｃ男は、校門から生徒玄関に向かう途中で、ある若い男性に駆け寄り、その男性と言葉を交わし肩を叩かれながら激励され、そそくさと生徒玄関に入っていきました。その間、彼が私に気付いたかどうかは定かでありません。急いでいたから気が付かなかったのか、私をあえて無視したのか。Ｃ男が駆け寄った男性の正体はすぐにわかりました。彼が通っている進学塾の講師だったのです。
　とりあえず、受験者全員が学校に入ったのを見届け、さて学校に戻ろうとすると、Ｃ男が生徒玄関から出てきて私のところに駆け寄ってきたのです。
「何だ？今さら朝のあいさつか？」
「内履きを忘れちゃったんです。」

「昨日あれだけ言ったよね。しっかり持ち物を確認して、それとできれば公共交通機関を使って来るようにって」「・・・・・・・・・・・・」
（いつもは弁がたつのに都合が悪くなるとだんまりか？）
（そのまま、靴下のままで試験受けたらどうだ？）
（高校の先生に自分で申し出てスリッパでも借りたらどうだ？）
（ママに電話して相談したらどうだ？）
（さっきの塾の先生に泣きついたどうだ？）
どれだけそう言いたかったかわかりません。しかし仕方なく、私から高校側に事情を伝え、中学校にいる職員に電話をして彼の内履きを届けてもらったのです。

合格発表の日、その高校を受けた中で彼だけが不合格となりました。
「ほら見たことか」という気持ちが全くなかったわけではありませんでしたが、
それでも肩を落として涙ぐむ彼を必死で慰めました。と同時に、自責の念も込み上げてきたのです。C男も彼なりに必死だったのだろうと。まだまだ未熟な中学生だったのだと。何を言っても無駄だとあきらめずに、粘り強くもっと必死に彼と向き合うべきだった、勝負すべきだったのではと。

前号の私自身の体験やこのエピソードが、私が目指す生徒像とする「周囲から『愛され・応援され・励まさられる』ような人間」に反映されているのは言うまでもありません。
結局C男は、いわゆる滑り止めの私立高校に進学しました。卒業以来これまで彼と顔を合わせる機会はありません。でも目の前に彼がいたとしたら、あらためてあの日に舞い戻ってこれだけは言いたいのです。当時、若い塾の講師よりも自分の方が何倍もお前の将来のことを考えていたと。数学の指導力もはるかに自分の方が上だったと。そしてそして何よりも、人はお金で買えないものほど大切にすべきなんだぞと。
いずれ同窓会などでC男と顔を合わせる日は巡ってくるかと思います。彼もそれなりの人生経験を積み重ねてきているとは思いますが、彼が今でもあのときのままのような人間だったとするならば、私は自信をもってダメ出しをしたいと思います。
おまえの生き様こそが“不合格”だと。